

サッカーにおける状況判断能力の年代比較

郷 旭登 (東京学芸大学)

1. 目的

学校のゲーム指導では状況判断能力のような思考力・判断力について、これまで発達段階に合わせた指導が行われてこなかったように感じる。そこで本研究の目的は、サッカー経験の有無による状況判断能力の年代比較を行い学習変容について明らかにすることである。

2. 方法

鬼澤ら(2004)がバスケットボールで行った戦術的状況判断テストを基にサッカー用を作成して、対象の8群に対して同一の調査を行った。被験者はボール保持者としてゴール前の攻撃局面の映像を視聴した後5つの選択肢から各問題で1つ最善だと考えるプレーを選ぶ。

1) 対象者：小学校、中学校、高校、大学の4校種をそれぞれ未経験者と経験者に分けた全8群である。各群35人を対象にして280人に調査協力を依頼した。

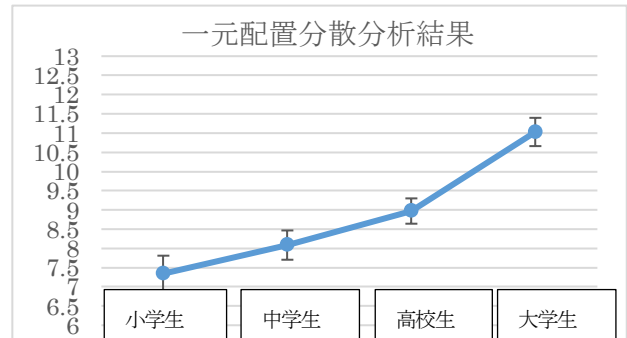
2) 調査時期：令和4年10月24日～11月19日

3) 分析方法：経験者未経験者それぞれ一元配置分散分析を使って分析した。その後、Bonferroniの多重比較を行い具体的にどの群間で変化があったかを明らかにした。

3. 結果と考察

1) 未経験者群による比較

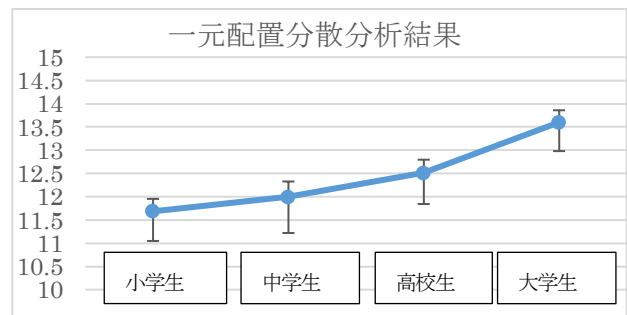
未経験者では、状況判断能力が年齢を重ねるごとに高まるという結果となった。さらに、群間比較を行うと大学生はその他すべての年代に対して有意差を示す結果となった。特に明らかに年代ごとに学習変容が見られた項目として「突破」の習熟度、シュートの優先順位の習熟度、フリーの認識の習熟度の3点で差が挙げられる。「突破」は、数的有利の状況でボールを前進させたいという原則を基に前方サポートするフリーの味方競技者に対してパスをしない選択ができるかどうかの能力であり、高校生から習熟度が高まっている。次にシュートについては数的同数であっても自身がフリーであれば第一優先をシュートにできるかの能力であり、同様に高校生から習熟度が高まった。最後にフリーの認識は数的同数でも相手競技者がマークにつけているのかを体の向きや距離間で判断する能力であり、大学生から習熟度が高まっていた。



(未経験者群の一元配置分散分析)

2) 経験者群による比較

経験者でも状況判断能力が年齢を重ねるごとに高まるという結果となった。さらに、大学生はその他すべての群に対して有意差を示す結果となった。特に学習変容の変化が見られた項目は未経験者同様に「突破」あり、高校生以上で習熟度の差が表れた。また、経験者の特徴として発達が早くから完了して高い水位で得点が収束しているため未経験者に比べて分散が小さくなるという傾向があった。



(経験者群の一元配置分散分析結果)

4. 結論

経験の有無に関わらず年齢を重ねるごとに状況判断能力が向上するということが明らかになった。特に「突破」の原則に関する状況判断能力は未経験者では大学生から経験者では高校年代から大きく状況判断能力が向上することが明らかになった。この結果からサポート行動などの効果的な指導が学校現場では行えていないと考えられる。そのため、学校教育における今後の課題としては、サッカーのプレーの優先事項を明確にした指導に取り組んでいくことである。

<参考文献>

- 1) 鬼澤陽子(2004)「バスケットボールの攻撃の映像を用いた戦術的状況判断テスト作成の試み」体育科教育学研究, 20(2), pp11-23.

